

介護の仕事に対する高校生の意識

藤沢 緑子

Survey of high school students' compassion for care work

Noriko FUJISAWA

要旨：本研究の目的は急速に少子高齢化が進む秋田県での介護人材新規確保の可能性を探り、若者の介護職就労を促進するための課題を明確にすることである。そこで本研究では県内の高校2年生を対象に、介護への関心や介護職への就労意識について質問紙調査を実施した。1155名から回答が得られ、以下のことが明らかになった。

1. 介護の仕事に関心がある生徒は40.0%、関心がない生徒は41.1%であった。
2. 介護の仕事に関心を持ったきっかけは、「高齢者や障害者が身近にいたこと」が最も多く39.8%、次いで「福祉や介護の仕事をしている家族や知人がいたこと」が37.4%であった。
3. 介護職就労を希望する生徒は22.2%、希望しない生徒は54.9%であった。介護の仕事に「とても関心がある」生徒の93.4%、「少し関心がある」生徒の37.1%が介護職就労を希望していた。
4. 介護職を希望しない理由としては「他に就きたい仕事がある」が最も多く51.7%、次いで「介護は自分に向かない」が43.8%、「肉体的・精神的に大変そう」が37.5%であった。
5. 身近に介護職の人がいる生徒は57.2%、要介護者がいる生徒は47.4%、ボランティア等の経験がある生徒は58.7%であった。そのうち、介護職就労を希望する生徒はそれぞれ2～3割、希望しない生徒は5割程度であった。
6. 職業選択で重視することとして、「将来的に安心できる職場」の割合が最も高かった。介護職就労を希望する生徒では「人や社会の役に立つ職業」の項目が最も高かった。

キーワード：高校生、介護意識、就労意識、秋田県

Abstract: The purpose of this survey was to find ways to secure human resources for care work and to clarify problems for the promotion of young adults to be employed as care workers in Akita prefecture where the declining birth rate and growing population of elderly people is advancing. Using a questionnaire, an attitude survey of second year high school students in Akita prefecture was conducted concerning their attention and compassion towards care work. Answers from 1155 students were obtained and the results were as follows.

1. The percentage of subjects who have concern for care work was 40.0%, while the percentage for who do not was 41.1%
2. The most frequent motivation for why they have concern for care work was “having elderly or physically challenged people in my neighborhood” (39.8%). Then, the second frequent motivation was “having caregivers in my neighborhood” (37.4%).
3. The percentage of subjects who wish to be employed as care workers was 22.2% while those who did not was 54.9%. Those who wish to be employed as care workers was 93.4% for subjects who showed “the most interest in working as caregivers,” and 37.1% of subjects who showed “some interest in working as a caregiver.”
4. The reasons why they did not wish to be employed as care workers were, “having the desire to work in other fields” (51.7%), “not having an aptitude for care work” (43.8%), and “care work seems to require mental and physical hardship” (37.5%).
5. Those who have caregivers in their neighborhood were 57.2%. Those who have persons who require nursing care were 47.7%. And those who have experience in care work such as volunteers were 58.7%. Among these, subjects who wish to be employed as care workers was 20 to 30% and those who do not was 50%.
6. The main point high school students regard as the most important when deciding their future occupation was the solidity of the job. Adding that for those who wish to be employed as care workers was the usefulness of the job towards society.

Key word: high school students, attitude for care works, motivation for jobs, Akita prefecture

日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科

本研究は平成23年度日本赤十字学園研究基金の助成を受けて行ったものである。

I. はじめに

近年、急速な高齢化が進行している我が国においては、福祉・介護に対するニーズの増大・多様化に伴い、介護サービスの更なる基盤整備や介護人材の確保、質の高い介護サービスの提供が大きな課題となっている。しかしながら、近年、介護サービスをめぐっては介護従事者の高い離職率、介護職希望者の減少、介護福祉士養成校における定員充足率の低下など、介護従事者の人材確保が困難を来している実態が明らかにされている。

日本私立学校振興・共済事業団の調査¹⁾によると、私立短大介護福祉学科の定員充足率は年々低下傾向にあり、平成16年度に95.5%であったものが平成24年度では67.8%となっている。介護福祉士養成校への入学者の減少は、将来の介護人材の減少を意味し、介護現場における人材不足の更なる深刻化が危惧されるものである。

今後も高齢化が加速化し、労働力人口の減少が見込まれる我が国において、未来を担う若者にみられる「介護離れ」の現象は極めて深刻な問題である。特に全国平均を上回るペースで少子・高齢化が進行している秋田県では、平成24年7月現在で高齢化率が30.4%に達しており、介護サービスの一層の充実が求められる。一方、介護労働安定センターが実施した『事業所における介護労働実態調査』（平成22年度）²⁾では、秋田県内の介護サービス施設・事業所全体の約4割において介護従事者が不足している実態が報告されている。今後も要介護高齢者の増加等ますます介護ニーズの増大が見込まれる中、地域の実態に即した人材確保策の検討が求められている。特に今後の社会を支える若者の存在は重要であると考え。そこで、本研究では若者の介護に対する意識、特に将来の進路選択において重要な時期となる高校生の進路に対する意識に着目したいと考えた。

これまで、高校生の進路に対する意識については多くの先行研究^{3) 4)}があるが、介護の仕事に対する意識について調査した研究は数少ない。神奈川県社会福祉協議会が全国の若者を対象にした調査⁵⁾、地域を限定した森らの調査⁶⁾、青柳の調査⁷⁾等があるが、秋田県内の高校生を対象とした研究は報告されていない。そこで、本研究では秋田県内の高校生に対する意識調査を行い、高校生の介護に対する関心、および介護分野への就労・進学意向等をはじめ、それらに影響すると考えられる様々な要因について明らかにし、今後の

秋田県における介護人材新規確保の可能性を探り、若者の介護職への就労を促進する上での課題を探ることをねらいとする。

II. 研究目的

秋田県内の高校生を対象とした介護の仕事に対する意識調査を通し、秋田県における今後の介護人材新規確保の可能性と若者の介護職就労を促進するための課題を探る。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：先行研究を基に独自に作成した質問紙による量的記述的研究
2. 調査方法：郵送法による無記名自記式質問紙調査
3. 調査対象：秋田県内の高校に在籍する2年生の生徒。各校につき、1クラスの生徒を調査対象とした。クラスが複数ある高校の場合は、文系進学クラスなどの福祉系大学・短大・専門学校への進学希望者が比較的多いクラス、あるいは福祉職への就職希望者が比較的多いクラスを対象とすることとした。なお、調査依頼にあたっては秋田県教育委員会の承諾を得た上で高校に対し、電話にて調査の趣旨を説明し、協力への同意が得られた34校に対して各校1クラス分の調査票（合計1317名分）を郵送した。
なお、秋田県教育委員会の「平成23年度学校統計一覧」によると、平成23年度現在、秋田県内の全高校数は66校、2年生に在籍している全生徒数は10222名であった。
4. 調査時期：平成24年1月～平成24年2月
5. 調査内容：①在籍している学科（コース）、②介護の仕事への関心の有無、③介護の仕事に関心を持ったきっかけ、④介護の仕事に関心を持ち始めた時期、⑤介護の仕事に対して抱く意識、⑥介護職への就労意向とその理由、⑦介護に関する経験（職場体験、インターシップ、ボランティア）の有無、⑧介護との接触状況（要介護者、介護職の人が身のまわりにいた経験の有無）、⑨職業を決める際に重視すること、⑩高校卒業後の希望進路、⑪福祉系大学等への進学希望の有無

IV. 倫理的配慮

本研究の倫理審査を本学研究センター倫理審査

委員会に申請して承認を得た後、研究の趣旨や調査票の内容について高校側に説明し、協力への同意が得られた高校に在籍する生徒を調査対象とした。生徒への説明文には研究目的、方法、協力の有無により不利益がないこと、結果は統計的に集計・分析し生徒個人のプライバシーを守ること、研究結果は本学研究紀要等で公表すること、研究結果は研究目的以外には使用しないことを明記し、同意が得られた回答を分析対象とすることとした。調査票に調査協力への同意の可否を選択する項目を設け、同意の可否を確認した。また、調査で得られたデータは研究室の鍵付き保管庫にて施錠して管理し、結果の公表後は速やかにシュレッダー処理にて廃棄することとした。

V. 研究結果

1. 調査票回収率

調査協力への同意が得られた34校に対して各校1クラスの生徒分の調査票（合計1317名分）を郵送し、学校で取りまとめたの返送を依頼した結果、32校から返信があった。調査票回収数は1155通、回収率は87.7%であった。調査への協力に同意が得られた1155名の回答を分析対象とした。

2. 調査項目の集計結果

1) 回答者の属性

回答者は男性347名（30.0%）、女性805名（69.7%）、無回答3名（0.3%）であり、女性が約7割を占めていた。

在籍している学科（コース）は普通科が最も多く877名（75.9%）、次いで総合科90名（7.8%）、農業科76名（6.6%）、福祉科44名（3.8%）生活科学（家庭）科33名（2.9%）、理数科8名（0.7%）、工業科7名（0.6%）、商業科6名（0.5%）、その他14名（1.2%）であった。

2) 介護の仕事に対する関心について

(1) 介護の仕事に対する関心の有無（図1）

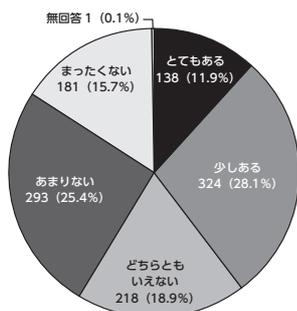


図1 介護の仕事への関心（n=1155）

介護の仕事に対する関心が「とてもある」138名（11.9%）、「少しある」324名（28.1%）、「どちらともいえない」218名（18.9%）、「あまりない」293名（25.4%）、「まったくない」181名（15.7%）であった。

(2) 介護の仕事に関心を持ったきっかけ（図2）

介護の仕事に関心がある（「とてもある」「少しある」）と答えた回答者462名に、関心を持ったきっかけを尋ねた（複数回答）。

「高齢者や障害者が身近にいたこと」が184名（39.8%）で最も多く、次いで「福祉や介護の仕事をしている家族や知人がいたこと」173名（37.4%）、「ボランティア活動に参加したこと」138名（29.9%）、「授業やインターンシップで介護の仕事を知ったこと」130名（28.1%）、「新聞やテレビ、雑誌で見たり聞いたりしたこと」77名（16.7%）の順であった。

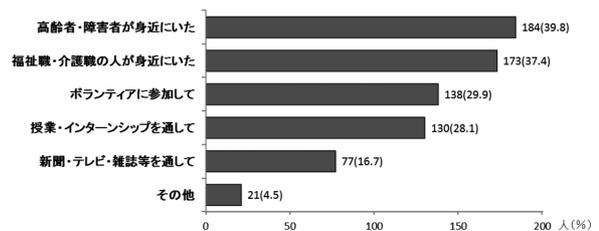


図2 介護に関心を持ったきっかけ（n=462）
〈複数回答〉

(3) 介護の仕事に関心を持ち始めた時期（図3）

介護の仕事に対する関心が「とてもある」「少しある」と答えた回答者462名に、関心を持ち始めた時期を尋ねた。

「中学3年」が最も多く102名（22.1%）、次いで「高校1年」92名（19.9%）、「中学2年」72名（15.6%）の順となっていた。

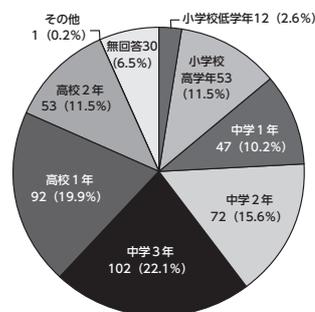


図3 介護に関心を持ち始めた時期（n=462）

3) 介護の仕事に対する捉え方

『介護の仕事はどのくらい社会に必要だと思うか』という設問に対し、「かなり必要である」923名(79.9%)、「やや必要である」196名(17.0%)、「どちらともいえない」23名(2.0%)、「あまり必要ない」6名(0.5%)、「全く必要ない」3名(0.3%)、無回答4名(0.3%)であり、ほとんどの回答者が介護の仕事は社会に必要であると答えている。

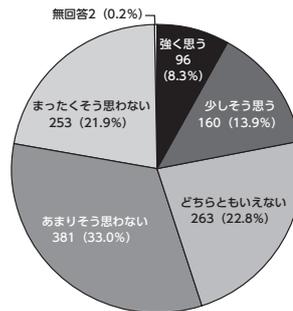


図4 介護の仕事をしたと思うか (n=1155)

4) 介護の仕事への就労について

(1) 介護の仕事への就労意向 (図4) (表1)

表1 介護に関心を持つ生徒の介護職への就労意向 設問「介護の仕事に就きたいと思うか」

就労意向 (就きたいか)	強く思う	少し思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	まったくそう思わない	計
とても関心がある	87 (63.0)	42 (30.4)	4 (2.9)	4 (2.9)	1 (0.7)	138 (100.0)
少し関心がある	9 (2.8)	111 (34.3)	127 (39.2)	72 (22.2)	5 (1.5)	324 (100.0)
計	96 (20.8)	153 (33.1)	131 (28.3)	76 (16.5)	6 (1.3)	462 (100.0)

『介護の仕事をしたと思うか』とする設問に対し、「強く思う」96名(8.3%)、「少し思う」160名(13.9%)、「どちらともいえない」263名(22.8%)、「あまりそう思わない」381名(33.0%)、「まったくそう思わない」253名(21.9%)であった。

介護に関する関心の高さと就労意向との関連に着目し、先述の『介護の仕事に対する関心の有無』において、関心が「とてもある」「少しある」と答えた462名の介護の仕事に対する就労意向を表1に示した。介護の仕事に「とても関心がある」生徒(138名)のうち93.4%が介護の仕事に就きたい(「強く思う」「少し思う」と答えているが、「少し関心がある」生徒(324名)では介護の仕事に就きたいとの回答は37.1%であった。

(2) 介護の仕事に就きたいと思う理由 (図5)

『介護の仕事をしたと思うか』の設問に「強く思う」「少し思う」と回答した256名に対し、介護の仕事に就きたいと思う理由を尋ねた(複数回答)。「人や社会の役に立つ仕事だと思うから」が最も多く169名(66.0%)、次いで「やりがいのある仕事だと思うから」146名(57.0%)となっており、これら2項目が他の項目より突出して高い割合を占めていた。

から」が最も多く169名(66.0%)、次いで「やりがいのある仕事だと思うから」146名(57.0%)となっており、これら2項目が他の項目より突出して高い割合を占めていた。

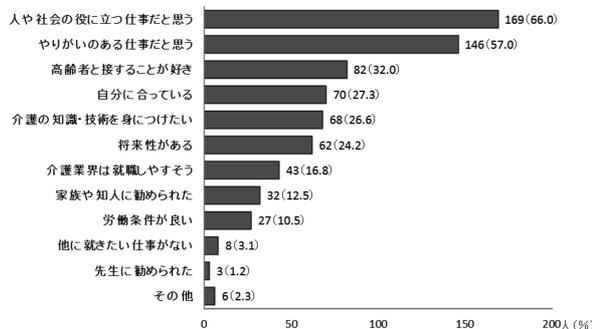


図5 介護の仕事につきたいと思う理由 (n=256) <複数回答>

(3) 介護の仕事に就きたいと思わない理由 (表2)

『介護の仕事をしたと思うか』の設問に「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した634名に対し、介護の仕事に就きたいと思わない理由を尋ねた(複数回答)。「他に就きた

表2 介護の仕事に就きたいと思わない理由 <複数回答>

就労意向	理由	他に就きたい仕事がある	自分に向かない	肉体的・精神的に大変そう	関心がない	労働条件が悪い	やりがい・魅力感じない	勤務体制不規則	将来性がない	家族・周囲が反対する	その他
「就きたいと思わない」(※1) (n=634)		328 (51.7)	278 (43.8)	237 (37.5)	174 (24.7)	123 (19.4)	78 (12.3)	64 (10.1)	25 (3.9)	20 (3.2)	13 (2.1)
「関心がある」(※2) 目付		47 (57.3)	26 (31.7)	28 (34.1)	1 (1.2)	21 (25.6)	3 (3.7)	5 (6.1)	5 (6.1)	2 (2.4)	3 (3.7)
「就きたいと思わない」(※1) (n=82)											

※1: 「介護の仕事をしたと思うか」の設問に対し、「あまりそう思わない」か「まったくそう思わない」と回答したもの
 ※2: 「介護の仕事に関心があるか」との設問に対し、「とても関心がある」か「少し関心がある」と回答したもの

い仕事があるから」が最も多く328名(51.7%)、次いで「介護は自分に向かないと思うから」278名(43.8%)、「肉体的・精神的に大変そうだから」237名(37.5%)、「介護には関心がない」174名(27.4%)、「労働条件が悪い」123名(19.4)の順に多かった。

また、介護の仕事に対して関心がある(「とても関心がある」「少し関心がある」と回答し、且つ『介護の仕事をしたと思うか』との設問に「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した計82名の、介護の仕事に就きたいと思わない理由を表2に示した。比較的高い割合を示

している項目は「他に就きたい仕事があるから」、「肉体的・精神的に大変そうだから」、「介護は自分に向かないと思うから」、「労働条件や待遇が悪いから」であった。

5) 介護に関する経験について

(1) 介護職者・要介護者との接触状況(図6)(図7)(図8)(図9)

『身のまわりに介護の仕事に就いている(いた)人がいるか』という設問に対し、「家族や親族にいる(いた)」360名(31.2%)、「知り合いにいる(いた)」300名(26.0%)、「いない」280名(24.2%)、「わからない」204名(17.7%)であり、

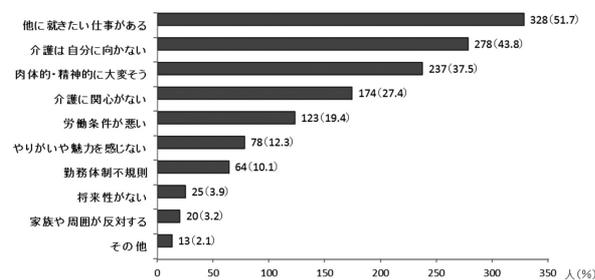


図6 介護の仕事に就きたいと思わない理由 (n=634)
(複数回答)

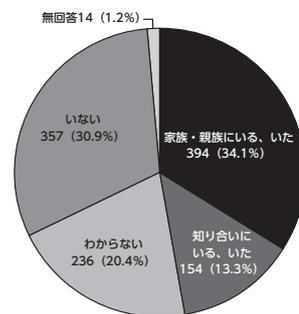


図7 身のまわりに要介護者がいるか (n=1155)

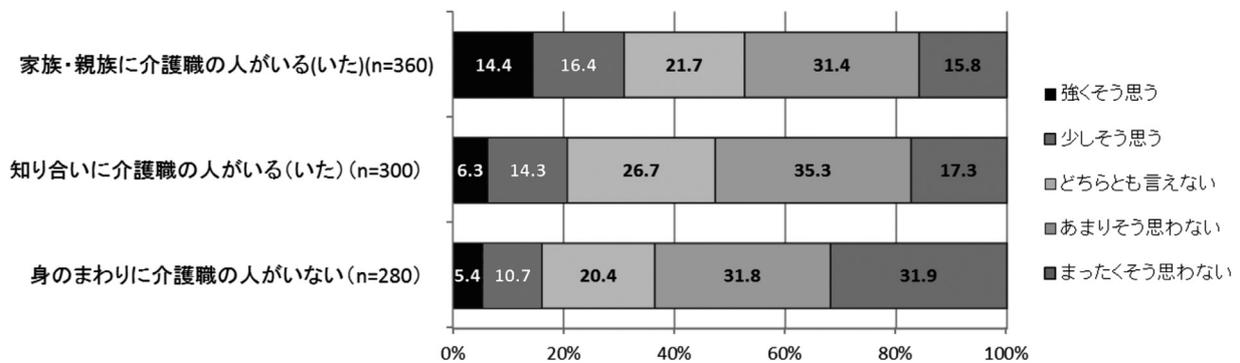


図8 身のまわりでの介護職者の有無と介護職への就労意向 設問「介護の仕事に就きたいと思うか」

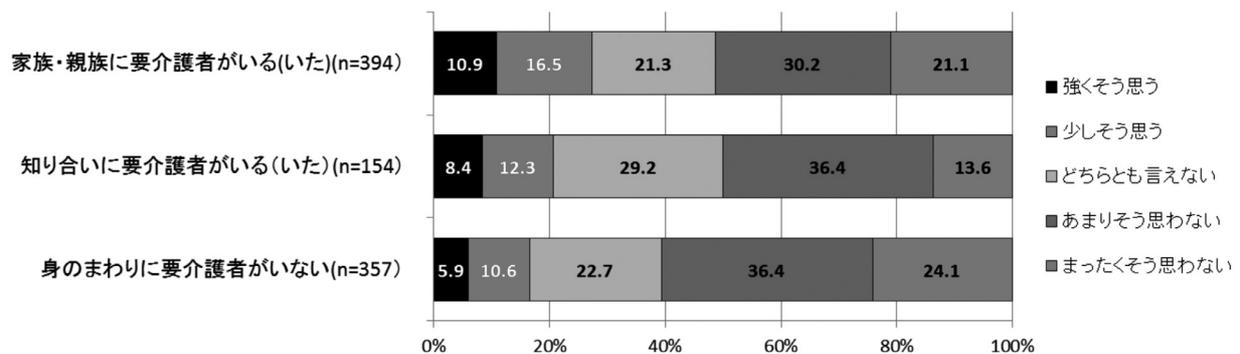


図9 身のまわりでの要介護職者の有無と介護職への就労意向 設問「介護の仕事に就きたいと思うか」

身近に介護職の人がいる（いた）経験を持つ生徒が全体の半数以上を占めていた。

また、『身のまわりに介護を受けている（いた）人がいるか』という設問に対し、「家族や親族にいて（いた）」394名（34.1%）、「知り合いにいて（いた）」154名（13.3%）、「いない」357名（30.9%）、「わからない」236名（20.4%）であり、身近に介護を受けている人（以下、「要介護者」とする）がいて（いた）経験を持つ生徒が全体の半数近くを占めていた。

介護職者や要介護者との接触の機会の有無と就労意向との関連に着目し、身のまわりに介護職の人がいて（いた）か否かによって就労意向を比較したものを図8に示した。また、身のまわりに要介護者がいて（いた）か否かによって就労意向を比較したものを図9に示した。3群の比較においては、介護の仕事に就きたいと考える生徒の割合は、家族や親族に介護職や要介護者がいて（いた）場合において最も高い。一方、介護の仕事に就きたいと思わない生徒の割合は、身のまわりに介護職や要介護者がいない場合において最も高い。ただし、家族・親族に要介護者がいて（いた）場合において、「あ

まりそう思わない」119名（30.2%）、「まったくそう思わない」83名（21.1%）となっており、介護の仕事に就きたくないと思う生徒の割合が合わせて51.3%となっている。

(2) 介護に関する職場体験、インターンシップ、ボランティア経験の有無 (図10) (図11)

「経験がある」678名（58.7%）、「経験がない」466名（40.3%）であった。介護に関する体験がある生徒が全体の半数以上を占めている。

経験があるか否かによる就労意向の違いを比較

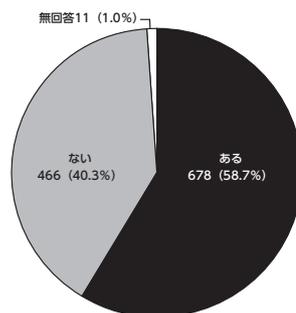


図10 介護に関する経験の有無 (n=1155)
(職場体験・インターンシップ・ボランティア等)

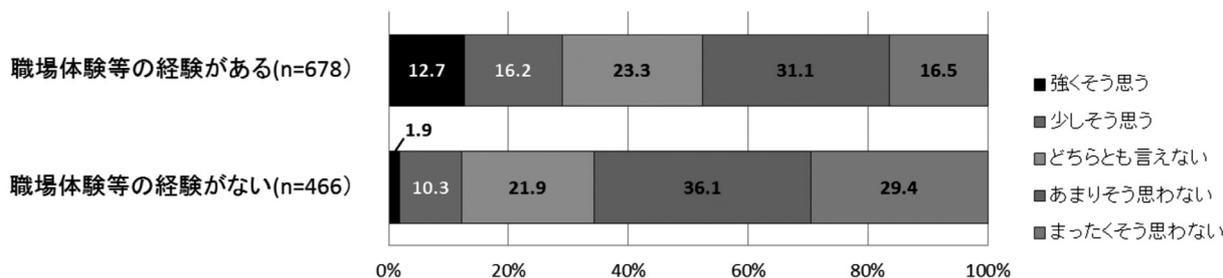


図11 介護に関する職場体験、ボランティア経験と介護職への就労意向 設問「介護の仕事に就きたいと思うか」

したものを図11に示した。経験がある場合、ない場合のどちらにおいても、介護の仕事我希望する生徒より希望しない生徒の割合が高い。特に、経験がない場合は希望しない生徒が65.5%を占めている。しかし、介護の仕事への就労希望者は「経験がある」生徒で28.9%、「経験がない」生徒で12.2%となっており、介護に関するボランティア経験等がある生徒の就労希望率が比較的高いことが示されている。

6) 職業選択における重視点 (表3) (図12)

表3に示した12項目をどの程度重視するかについて、5段階で回答を求めた。『重視する』の割合が最も高かったものは「将来的に安心できる職

場であること」660名（57.1%）であり、次いで「自分の能力や個性が活かせること」638名（55.2%）、「職場の雰囲気がよいこと」626名（54.2%）、「人や社会の役に立つ職業であること」529名（45.8%）、「給料が高いこと」413名（35.8%）の順で高かった。

次に、介護の仕事に就きたいと思う生徒の職業選択における重視点について図12に示した。介護の仕事に就きたいと思う生徒において、「重視する」の割合が最も高い項目は「人や社会の役に立つ職業であること」152名（59.4%）であった。次いで「職場の雰囲気がよいこと」146名（57.0%）、「将来的に安心できる職場であること」

表3 職業を決めるときに重視すること (n=1155)

項目	重視の割合	重視する	どちらかといえば重視する	どちらともいえない	どちらかといえば重視しない	重視しない	無回答
将来的に安心できる職場であること	660(57.1)	361(31.3)	100(8.7)	13(1.1)	7(0.6)	14(1.2)	
自分の能力や個性が活かせること	638(55.2)	402(34.8)	85(7.4)	13(1.1)	4(0.3)	13(1.1)	
職場の雰囲気が良いこと	626(54.2)	398(34.5)	94(8.1)	15(1.3)	16(1.4)	6(0.5)	
人や社会の役に立つ職業であること	529(45.8)	375(32.5)	176(15.2)	46(4.0)	15(1.3)	14(1.2)	
給料が高いこと	413(35.8)	527(45.6)	163(14.1)	30(2.6)	12(1.0)	10(0.9)	
仕事を通して資格・技術が身につけられること	400(34.6)	445(38.5)	214(18.5)	67(5.8)	18(1.3)	11(1.0)	
地理的条件が良いこと (通勤が便利)	289(25.0)	468(40.5)	269(23.3)	97(8.4)	20(1.7)	12(1.0)	
人と接する機会が多いこと	277(24.0)	344(29.8)	343(29.7)	119(10.3)	60(5.2)	12(1.0)	
休みが十分取れること	268(23.2)	446(38.6)	288(24.9)	112(9.7)	29(2.5)	12(1.0)	
昇進の可能性があること	208(18.0)	380(32.9)	370(32.0)	124(10.7)	62(5.4)	11(1.0)	
将来独立して仕事ができること	160(13.9)	211(18.3)	408(35.3)	223(19.3)	136(11.8)	17(1.5)	
知名度が高い職場であること	90(7.8)	267(23.1)	436(37.7)	245(21.2)	109(9.4)	8(0.7)	

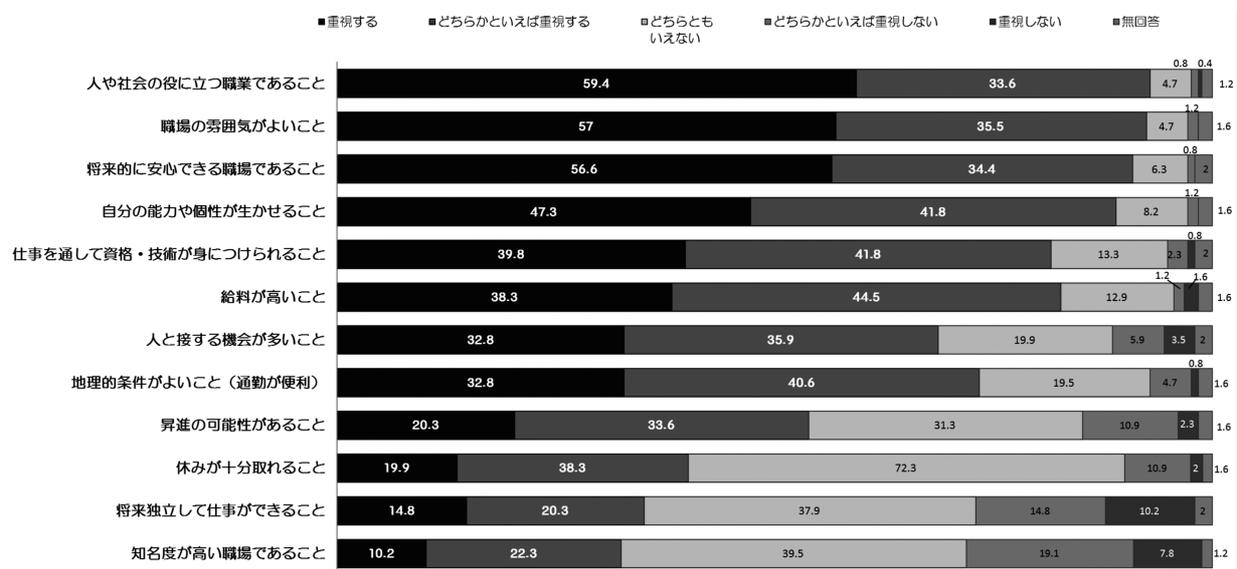


図12 職業を決めるときに重視すること (介護職希望者 n=256)

145名 (56.6%) が高かった。

7) 今後の進路について

(1) 高校卒業後に希望する進路 (図13)

高校卒業後に希望する進路については、県内就職237名 (20.5%)、県外就職113名 (9.8%)、県内進学299名 (25.9%)、県外進学465名 (40.3%)、未定67名 (5.8%) その他3名 (0.3%)、無回答67名 (5.8%) であった。

4区分の中では県外進学希望者が最多であった。県外進学・県外就職希望者をあわせると578名 (50.0%) であり、全体の半数の生徒が卒業後に県外に出ることを希望していた。県内に残ることを希望する生徒は536名 (46.4%) であった。

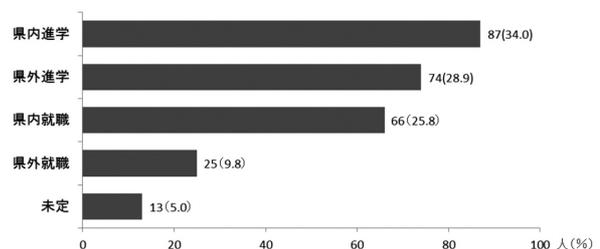


図13 介護職を希望する生徒の高校卒業後の希望進路 (n=265)

次に、介護の仕事に就きたいと思う生徒 (265名) の進路希望について図13に示した。県内進学が最も多く87名 (34.0%)、次いで県外進学74名

(28.9%)であり、6割以上の生徒が進学を考えている。次いで、県内就職66名(25.8%)、県外就職25名(9.8%)の順となっていた。

秋田県内での進学・就職に着目すると、前述のように県内進学87名(34.0%)、県内就職66名(25.8%)であり、高校卒業後も秋田県内に在住して介護職を目指す可能性のある生徒は153名となり、全体(1155名)の13.2%であることがわかった。

(2) 福祉系大学等への進学希望(表4)(表5)

『高校卒業後、福祉系の大学・短大・専門学校で学んでみたいと思うか』とする設問に対し、「強くそう思う」98名(8.5%)、「少しそう思う」134名(11.6%)、「あまりそう思わない」360名(31.2%)、「まったくそう思わない」337名(29.2%)であり、福祉系大学・短大・専門学校への進学を希望する生徒は全体の約2割であった。また、その進路希望先の内訳としては、専門学校希望109名(46.9%)が最も多く、次いで四年制大学希望65名(27.9%)、短大希望38名(16.3%)、未定18名(7.7%)、無回答3名(1.3%)であった。

次に、介護の仕事に就きたいと思う生徒(256名)の進学希望について表4に示した。福祉系大学等で学んでみたいかについて、「強くそう思う」69名(27.0%)、「少しそう思う」72名(28.1%)であり、両者を合わせると141名(55.1%)であった。介護の仕事に就きたいと思う生徒の5割以上が福祉系大学等で学ぶことを希望する専門職志向であることが示された。

表4 介護職を希望する生徒の福祉系大学等への進学意向 (n=256)

設問「卒業後に福祉系の大学・短大・専門学校で学びたいか」

進学意向	件数 (%)
強くそう思う	69 (27.0)
少しそう思う	72 (28.1)
どちらともいえない	57 (22.3)
あまりそう思わない	39 (15.2)
まったくそう思わない	19 (7.4)
計	256 (100.0)

表5 介護職を希望する県内進学希望者の福祉系大学等への進学意向 (n=87)

設問「卒業後に福祉系の大学・短大・専門学校で学びたいか」

進学意向	件数 (%)
強くそう思う	48 (55.2)
少しそう思う	22 (25.3)
どちらともいえない	11 (12.6)
あまりそう思わない	6 (6.8)
まったくそう思わない	0
計	87 (100.0)

なお、表5に示したように、介護の仕事に就きたいと希望し、且つ県内進学を希望している87名については、48名(55.2%)が福祉系大学等への進学を強く希望していることが示された。

VI. 考察

1. 介護の仕事に対する関心と就労意向について

今回の調査では、介護職就労を希望する生徒(以下、「介護職希望者」とする)は22.2%、希望しない生徒は54.9%、どちらともいえないとする生徒は22.8%であり、希望しない生徒が半数以上を占めているという結果となった。

神奈川県社会福祉協議会が2009年に全国の18~22歳の若者808名を対象に実施した調査⁸⁾によると、介護職就労の希望者は約5%、非希望者が77%であったことが報告されている。また、2007年に青柳⁹⁾が600名の高校生を対象に行った調査では介護職希望者が14.7%、2010年に森ら¹⁰⁾が愛媛県下の高校生1340人を対象に行った調査では介護職希望者が15.9%であったことが報告されている。今回の調査では、既に高校において福祉科目を学習している福祉科(3.8%)や生活科学科(2.9%)等に在籍する生徒も含むことから、このことが希望者の割合に反映しているとも考えられるが、秋田県が全国一の高齢県であることから若者の介護への関心が比較的高いことが推察される。

本調査の中では就労意向の他、介護の仕事への関心についても尋ねている。関心を持つ生徒は全体の4割を占めていた。さらに、社会の中での介護職の必要性について、97%の生徒が「必要」と認識していた。しかしながら、介護職希望者は前述のように全体の2割程にとどまっていることから、介護職の必要性を認識し関心を持ちながらも就労には結びつきにくいことが示唆された。

2. 介護職への就労意向とその理由について

介護職希望者の希望理由としては「人や社会の役に立つ仕事だと思うから」、「やりがいのある仕事だと思うから」の2項目が他の項目よりも突出して高率であった。これについては、介護職希望者の『職業選択における重視点』で、「人や社会の役に立つ職業であること」の項目が最も高率であったことと重なる結果であった。これに対し、介護職を希望する理由として「他に就きたい仕事がない」「家族や知人に勧められた」「先生に勧められた」「介護業界は就職しやすそう」などの項目は割合が低かった。

介護職希望者の中には、他者や社会に貢献できる介護の仕事にやりがいや魅力を感じ、積極的な意思をもって介護職を目指そうとする生徒が多いことが読み取れる。このような積極的な意思を持つ生徒の意欲を持続させ、確実に介護職就労に結びつけていくことが望まれる。そのために、介護職の重要性、やりがいや魅力等を高校生に向けて情報発信するなど、介護職希望者の意欲をさらに喚起できるような働きかけが必要と考える。

一方、介護職就労を希望しない生徒が挙げた理由としては「他に就きたい仕事がある」が最も多く、次いで「介護は自分に向かないと思う」、「肉体的・精神的に大変そう」が挙げられていた。介護職不足が深刻な社会にあって、介護職就労者層の拡大を図ることは重要課題であるが、介護職ではない他職を希望し、介護労働に伴う心身の負担感を懸念し、介護は自分に向かないと感じる若者層に対して介護職就労を促すことにはかなりの困難があると推察される。

しかし、本調査では介護職就労を希望しない生徒の中にも介護に関心を持っている生徒がいることが明らかとなった。こうした層は、将来介護の仕事を選択する可能性がある有力な人材とも考えられるため、介護職就労を促していく対象として捉えていくことが有効ではないかと考える。

介護に関心を持ちながらも介護職就労を希望しない理由としては、割合の高い順に「他に就きたい仕事がある」、「精神的・肉体的に大変そう」「介護は自分に向かない」、「労働条件や待遇が悪い」となっていた。上位3項目については全体の傾向と同様であったが、労働条件や待遇については現職の介護従事者を対象とした調査¹¹⁾でも指摘されている問題である。こうした実態が若者の職業選択にも影響し、介護職就労を躊躇させる要因となっていることが示唆された。介護現場における待遇改善の必要性が叫ばれるようになって久しいが、介護に関心を持ちながらも介護職就労を希望しない層を介護職就労に結びつけるためにも、労働条件や待遇の改善等早急の対策が必要であると言える。

3. 介護に関する経験の有無と就労意向について

介護に関する経験の有無と介護職への就労意向との関連を探るため、介護職や要介護者との接触状況（家族や親族、知り合いにいますか）、介護に関する職場体験等の経験の有無について尋ねた。

介護職との接触状況、要介護者との接触状況ともに、「いない」と回答した生徒よりも「いる（いた）」と回答した生徒において介護職希望者が多かった。また、「知り合いにいます（いた）」よりも、「家族・親族にいます（いた）」と回答した生徒において介護職希望者の割合が比較的高いことが明らかとなった。これについては『介護に関心を持ったきっかけ』の設問において、高齢者や障害者、介護職の人が身近にいたことをきっかけとする回答が多かったこととも重なり、こうした経験が介護職希望につながる強い動機づけとなるものと考えられる。

しかし、介護職の人や要介護者が身近にいる（いた）生徒の1割程度が介護職への就労を強く希望していた一方、就労を希望しないとの回答は、それぞれ5割程度に上っていた。特に家族や親族に要介護者がいる（いた）生徒の中の2割以上が『介護職に就きたいと思うか』との設問において「まったくそう思わない」と回答しており、介護に対する強い否定的な意識が読み取れる。在宅での介護は同居する家族員に大きなストレスを与える可能性もあることから、こうしたことが介護に対する否定的な意識につながっているのではないかと考える。

また、介護に関する職場体験についても、経験の有無と就労意向との関連を見たところ、経験がない生徒よりも経験がある生徒の方が介護職希望者の割合が高かった。職場体験やインターンシップ、ボランティア活動に参加することは、その前提として介護に対する関心があることが推察されるため、経験がない生徒に比べて介護職希望者の割合が高くなるものと考えられる。つまり、経験以前から既に介護職就労を希望している場合もあると考えられるが、実際の介護現場での出会いや介護体験が、感動や「人の役に立つ」という喜びを生む経験となり、介護職希望への動機づけとなるのではないかと考える。

介護職に関心をもつ生徒が介護現場での職場体験等を通して要介護者とふれ合う機会を持ち、介護の喜びや感動を感じる経験ができれば、さらに介護職就労を目指す若者層が拡大する可能性があるのではないかと考えられ、こうした機会の充実が図られることが期待される。

V. 結語

1. 秋田県における今後の介護人材新規確保の可能性について

本調査での調査対象は平成23年度に県内の高校に在学中の2年生1155名である。今回の調査から、1155名中の578名（50.0%）が卒業後に県外に出ることを希望しており、県内に残ることを希望する生徒は536名（46.4%）であることが示された。また、介護職希望者（256名）中、87名（34.0%）が県内進学、66名（25.8%）が県内就職を希望していた。高校卒業後も秋田県内に在住して介護職を目指す可能性がある生徒は計153名となり、全体（1155名）の13.2%であることがわかった。なお、県内進学を希望する84名中、48名（55.2%）が福祉系大学への進学を強く希望していることが示された。

2. 若者の介護職就労を促進するための課題について

介護職希望者256名（22.2%）の中には、他者や社会に貢献できる介護の仕事にやりがいや魅力を感じ、積極的な意思をもって介護職を目指そうとする生徒が多かった。こうした生徒を介護職就労に結びつけるためには、介護職の重要性、やりがいや魅力等を高校生に向けて情報発信するなど、介護職希望者の就労意欲をさらに喚起できるような働きかけが必要である。

介護職を希望しない生徒634名（54.9%）の多くは介護職以外の職業を希望し、介護労働に伴う心身の負担感を懸念し、介護は自分に向かないと感じており、介護職就労を勧めていくにはかなりの困難が予想される。しかし、介護職就労を希望しない生徒の中にも介護に関心をもっている生徒がいることが明らかとなった。こうした層は、将来介護の仕事を選択する可能性がある人材とも考えられるため、介護職就労を躊躇する要因をさらに分析し、介護職就労を促していくことが有効と考える。

また、本調査では様々な介護に関する経験が介護職への就労意向にも影響する可能性があることが示唆された。介護職や要介護者と身近に接する機会がある生徒が、経験のない生徒と比較して介護職希望者の割合が高く、また、介護現場での職場体験等がある生徒において介護職希望者の割合が比較的高いことが示された。介護に関する経験が介護職希望につながる動機づけとなることが推察される。介護職に関心を持つ生徒が介護現場での職場体験等を通して要介護者とふれ合う機会を

持ち、介護の喜びや感動を感じる経験ができれば、さらに介護職就労を目指す若者層が拡大する可能性があると考えられ、こうした機会の充実が図られることが期待される。

謝辞

本調査の実施にあたり、ご協力いただきました高校の先生方ならびに高校生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター. 平成24（2012）年度私立大学・短期大学等入学志願動向. 2012, 46.
- 2) 財団法人介護労働安定センター秋田支部. 平成22年度介護労働実態調査結果. 2011, 2.
- 3) ベネッセ教育研究開発センター. 第2回子ども生活実態基本調査報告書. 2009.
http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/index.html
- 4) 社団法人全国高等学校PTA連合会, 株式会社リクルート進学カンパニー. 高校生と保護者の進路に関する意識調査. 2010.
- 5) 神奈川県社会福祉協議会介護分野における人材不足に関わる調査研究委員会. 介護業界および介護職に対する若者のイメージ調査報告書. 2010, 63-67.
- 6) 森正康, 清田美玲, 佐藤晴美, 杉本詠二, 長谷川美音, 水野喜代志, その他. 高校生の介護に関する意識の原状と課題：愛媛県下の事例を中心として. 松山東雲短期大学研究論集 vol.41 2011, 17-18.
- 7) 青柳育子. 高校生の介護意識の実態と課題－高等学校3校のアンケート調査から－. 日本生涯教育学会論集 29, 2008.
- 8) 前掲書5)
- 9) 前掲書7)
- 10) 前掲書6)
- 11) 介護労働安定センター. 平成23年度介護労働実態調査結果について.
http://www.kaigo-center.or.jp/report/h23_chousa_01.html, 2011.